

# 琉球大学学術リポジトリ

韓国語の「パンマル」と日本語の「ため口」の違い  
に関する一考察 — 待遇表現の指導方法と関連して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2008-07-17 キーワード (Ja): 格式体表現, 非格式体表現, 「パンマル」, 「ため口」, 待遇表現 キーワード (En): formal expressions, informal expressions, ban-mal, tame-guchi, attitudinal expressions 作成者: 長嶺, 聖子, Nagamine, Seiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/6708">http://hdl.handle.net/20.500.12000/6708</a>

## 韓国語の「パンマル」と日本語の「ため口」の違いに関する一考察 — 待遇表現の指導方法と関連して —

長 嶺 聖 子

### 要 旨

韓国語と日本語は語順がほぼ同じで、文法も類似しており、中高年層の韓国語学習者も少なくない。中高年層の多くが好きな映画やドラマの内容を韓国語で知りたいと望んでいるようだが、筆者が教えている大多数の大学生も会話主体の韓国語の学習を強く希望している。ところで、韓国語には、格式体表現と非格式体表現があり、映画やドラマなどでは、後者の非格式体表現、つまり会話体の打ち解けた言い方である「パンマル」体が非常に多く使われている。しかし、最近日本の一部の著書において、この韓国語の「パンマル」と日本語の「ため口」がまるで同一であるかのように扱われていることがよくある。本稿では、この安易な同一視から生じる誤解や混乱を避けるため、まず韓国語における「パンマル」の概念を明確にし、次に日本語の「ため口」に関する一般的概念を、筆者が実施したアンケート調査を基に明らかにして、その基本的な違いを比較する。その上で、「パンマル」を含めた待遇表現の指導方法を提示する。

キーワード：格式体表現、非格式体表現、「パンマル」、「ため口」、待遇表現

### 1. 「パンマル」の概念

#### 1. 1 「パンマル」の意味

韓国の敬語構造は、一般的には、존댓말 (Jon-daen-mal : 尊敬語と丁寧語) と 반말 (Ban-mal : 普通語) の二つに大きく区分して認識されている。존댓말 (Jon-daen-mal) は、漢字の「尊待」の音読みである「존대 (Jon-dae)」に、韓国固有語でことばを意味する「말 (mal)」を合わせてできた合成語であり、目上の人には当然のこと、初対面の同年齢や年下 (中高校生以上) に対しても使われることばである。반말 (Ban-mal) は、漢字の「半」の音読みである「반 (Ban)」に、韓国固有語でことばを意味する「말 (mal)」を合わせてできた合成語である。「半言」という意味を持つ「パンマル」は、友人や年下の人に対して使用されることばで、また家族に対しても親しみを込め

た、甘えて言うことばにもなる。テレビ放送のように公的な場合を除いて、年少者に対しては当然のように「パンマル」を使う傾向がある。

韓国の諺に、「오는 말이 고와야, 가는 말도 곱다 (Oneun-mari-gowaya, Ganeun-maldo-gopta: 優しいことばで言われると優しいことばで返す。つまり、売りことばに買いことば)」、というのがある。年上で親しくない間柄の人に対して「パンマル」を使用すると、しばしば大喧嘩になることがある。事実、韓国人の喧嘩の大半はこの「パンマル」が起因するとも言われている。だからと言って、「ジョンデンマル」ばかりを使用すると、お互いの距離感がなかなか縮まらない。つまり、年下を除いて、「パンマル」で言い合える間柄というのは、親しい間柄ということになる。

차현실 (1990) は、「パンマル」は、現代韓国語において、世代、社会的立場や性別などを問わず、親しい間で非格式的に最も広く使われている口語体であると述べている。한길 (1986) も、現代韓国語で最も多く使われていることばは、非格式体の「パンマル」と「パンマル+ヨ:パンマルの丁寧な形」であることを指摘し、その上で、待遇表現の体系の中で「パンマル」を明文化し、その正しい位置づけを行なった。それを示したのが後述の〈表2〉である。

## 1. 2 待遇表現体系の中の「パンマル」

韓国語の「ジョンデンマル」と「パンマル」という敬語構造について、野間秀樹 (1996) は、「ジョンデンマル」=敬意体、「パンマル」=非敬意体であると言い、韓国語待遇表現体系の二極化が完成していると述べている。特に野間秀樹は、ソウル (韓国語標準語基準地域) で行なったアンケートの結果から、ソウルでは、敬意体として非格式体の「パンマル+ヨ:パンマルの丁寧な形」が最も多く使われていると結論づけている。このように、韓国の敬語構造は一般的には、「ジョンデンマル」と「パンマル」の二つに区分されているが、厳密な文法上の区分では、韓国語の敬語体系は、主体敬語、客体敬語、相対 (聴者) 敬語の三つに分けられている。

主体敬語とは、主体になる主語が尊敬対象であれば、述語に尊敬を表す尊敬接辞 (韓国語では先語末語尾という) ‘-시 (si)-’ が語幹と終結語尾の間に入り、敬語を作るという待遇表現である。客体敬語とは、語尾の変化によるものではなく、限られた敬語語彙によってもたらされる待遇表現のことであるが、現代韓国語においては次第に弱体化しつつある。三つ目の相対 (聴者) 敬語とは、話し手と聞き手が対面して行なう待遇表現であり、これが韓国語の待遇表現の中心になる。日本語では「対者敬

語」に相当する。相対（聴者）敬語は、人称代名詞や助詞、そして終結語尾で表す待遇表現だが、その中でも特に終結語尾が複雑に発達している。この終結語尾の敬語レベルは、格式体と非格式体を混ぜ合わせてレベル分けされており、学者によって4段階から6段階まで区分されている。

ここで、「パンマル」が上記の終結語尾の敬語レベルの中で、どのように位置づけられているのかを確認するために、6段階に区分された敬語レベルを用いて、どのレベルが格式体または非格式体に相当するかを参考までに筆者が書き加えて紹介したい。これが下記の〈表1〉である。（日本語訳は、油谷幸利（1997）の表現を引用した。）

また〈表2〉は、その6段階の敬語レベルを格式体と非格式体の二つに分類し、新たに「パンマル」ということばを導入して、「パンマル」の位置づけを明確に示したものである。この表は、한길（1986）が作成した図表に筆者が日本語訳を付したものである。

〈表1〉 6段階の韓国語敬語レベル

①格式体—합쇼체	(hapsho-che)	— 上称：最も丁寧な表現
②非格式体—해요체	(haeyo-che)	— 略体上称：親しみをこめた丁寧な表現
③格式体—하오체	(hao-che)	— 中称：成人間で軽微な敬意を表す場合
④格式体—하계체	(hage-che)	— 等称：相手を下位者として待遇するが、 子ども扱いは出来ない場合
⑤非格式体—하체	(hae-che)	— 略体：待遇区分をぼかす場合
⑥格式体—하러체	(haera-che)	— 下称：聞き手に対する敬意が無い場合

〈表1〉から分かることは、韓国語の相対敬語の終結語尾による敬語表現には、格式体（①、③、④、⑥）と、非格式体（②、⑤）があるということである。上記の各レベルのうち、③番の中称形と④番の等称形は、実際にはあまり使用されておらず、성기철（1996）によれば、この二つは30代以下の年齢層ではほとんど使われてないと言う。また성기철は、この二つの空白を埋めるために、その代替として非格式体がより多く使われるようになり、全体的に格式体の体系が大きく崩れたと主張する。⑤非格式体の하체 (hae-che) と⑥格式体の하러체 (haera-che) が「パンマル」である。

〈表2〉 敬語レベルの二元的体系 (한길, 1986)

区分 丁寧度	格式体	非格式体	区分 丁寧度
높임 (高い)	① 아주높임 (上称)	② 반말에 - 요 통합형태 「パンマル+ヨ」形	높임 (高い)
	③ 예사높임 (中称)		
낮춤 (*低い)	④ 예사낮춤 (等称)	⑤ 반 말 「パンマル」	안 높임 (*高くない)
	⑥ 아주낮춤 (下称)		

〈表2〉が示すように、한길は、格式体の4つのレベルは、非格式体である②の「パンマル+ヨ」形と、⑤の「パンマル」の二つの言い方で対応することが可能であると述べている。すなわち、〈表1〉と〈表2〉の①と③が〈表2〉の②「パンマル+ヨ」形、そして、〈表1〉と〈表2〉の④と⑥が〈表2〉の⑤「パンマル」で置き換えられると言っている。

### 1. 3 「パンマル」の丁寧度

非格式体は、打ち解けた言い方で、格式体と比べて日常生活の中で最も多く使われている待遇表現である。김혜숙 (1987) は、社会言語学的な観点から見ると、話し手が聞き手もしくは第3者の人物についてどのような待遇で接するかは、心理的な関係により決まるものであり、それに基づいて文法的な言語形式が選択され、その結果が待遇表現となって結実すると述べている。つまり、話し手は聞き手の年齢の上下関係、親疎関係や社会的地位などに合わせて敬語レベルから適切な終結語尾を選び、聞き手に相応しい待遇表現を用いるのである。ここで、待遇表現の体系の中における「パンマル」の丁寧度を確認したい。

〈表2〉の「パンマル」の丁寧度は、안높임 (An-nopim: \*高くない) となっている。これは、同レベルである格式体の④番と⑥番の丁寧度が낮춤 (Natchum: \*低い) となっていて、表現が異なる。もちろん、ことばの意味から考えると、「高くない」と「低い」は同じ意味として解釈できるが、「パンマル」の丁寧度をあえて「低い」とは言わず、「高くない」と表現したことには理由がある。

上記の1. 1 「パンマル」の意味で、「パンマル」は友人や年下の人に対して言うことばであり、家族に対しては親しみを込めた、甘えて言うことばでもあると述べた。つまり、聞き手が目上であっても家族のように親密な関係であれば、「パンマル」の

待遇表現が可能である。これは決して聞き手を低く見て言うことではないので、丁寧度は낮춤 (Natchum: \*低い) とは言わず、안높임 (An-nopim: \*高くない) となるのである。しかし、④番의 예사 낮춤 (Yesa-natchum: 等称) と、⑥番의 아주 낮춤 (Aju-natchum: 下称) の場合は、「パンマル」のように使うことはできないので、丁寧度は낮춤 (Natchum: \*低い) になるのである。

非格式体の「パンマル」の丁寧度が낮춤 (Natchum: \*低い) ではなく、안높임 (An-nopim: \*高くない) と表現しているのは、格式体④の等称までもカバーするほど幅広く使用されるようになったからだと考えられる。고광모 (2001) も、実生活では、「パンマル」の方が格式体の④番의 예사 낮춤 (Yesa-natchum: 等称) と⑥番의 아주 낮춤 (Aju-natchum: 下称) を合わせた範囲よりももっと広く使われていると指摘している。このような現象について、서정수 (1989) は、韓国は1945年8月15日以降、社会制度の変化によって身分上の上下関係に対する観念が希薄になり、さらに、平等思想の浸透によって待遇表現の体系が大きく変化したと論じている。

このように、「パンマル」は、待遇表現体系の中で格式体の④等称と⑥下称の使用範囲をカバーするほどの変化を遂げてきている。そして、「パンマル」の語尾に‘ヨ’を付けると、「パンマル」の丁寧な言い方になる。ある映画で、韓国語の「パンマル」しか話せないアメリカ人英語教師が、忠清道出身の学生にその「パンマル」に‘ユ (ヨの忠清道方言)’を付けるように指示される場面がある。その教師は、英語の‘You’の発音に近い‘ヨ’の方言‘ユ’をつけることで丁寧語で優しい表現の韓国語を駆使できるようになったという話のだが、これは正に、「パンマル」と「パンマル+ヨ」体の特徴や現代韓国語の口語体としての「パンマル」の浸透度を物語っている。

## 2. 「ため口」の概念

### 2. 1 「ため口」の意味

「ため口」の「ため」は、「対等」、「同じ」を意味する俗語に「口」を合わせて作られた合成語であり、「ため」は元来賭博用語で「同目 (ゾロ目)」を意味した (『日本語俗語辞書、2006』)。現在では、同じ年齢のことを「ため年」ということもあるが、このことばは、昭和の中期頃から不良少年の間で「同じ」という意味で使われはじめ、昭和の後期頃からは若者を中心に広がった。『日本語俗語辞書』によると、「年代」は1979年、「種類」は若者言葉と示されており、まだ30年ほどの歴史しかない単語である。岩波書店の『広辞苑』の第5版 (1998) には、「ため：相手と同程度の位置であるこ

とをいう俗語、「～口）」と書かれている。つまり、「ため口」は、日本語の長い歴史の中で約30年しか使われてない俗語なのである。

最近、コンピューター時代と呼ばれ、社会の変動も激しく、世代の時間幅も短くなってきているが、以前は30年という年数をワン・ゼネレーションという一つの世代として認識していた。社会学では、世代のことを出生時期を同じくし、同一時代背景のもとで歴史的・社会的経験を共有し、共通した意識形態や行動様式をもつようになった人々の集合体であると定義している(森岡清美他、1996)。韓国では、戦後「ハングル」中心の教育により、漢字をあまり知らない世代の人々を「ハングル世代」と呼んでいる。このように、世代とことばは大変密接な関係がある。

約30年前の若者世代を中心に使われ始まった「ため口」ということばがまだその力を失うことなく、日本語の中で「仲間ことば」の名称となり、そのレベルの待遇表現として定着しているということは注目に値する。

## 2. 2 待遇表現の中の「ため口」

日本語の敬語は、基本的には対者敬語と素材敬語に分けられるが、現在は、尊敬語、謙讓語、丁寧語の三つに分けるのが一般的である(辻村敏樹、1989)。油谷幸利(1974)も、素材敬語である尊敬語を聞き手に対する対者敬語として扱い、最敬体(いらっしゃいます)、敬体(です・ます)、そして常体(だ・である)に分けている。つまり、聞き手を敬うことばばかりではなく、敬語を使わなくてもいい相手に対する話し方も含めて説明している。今は、「敬うことば」という意味の「敬語」という表現ではなく、もっと広い意味としての「待遇表現」ということばが頻繁に用いられるようになっている。

日本語の待遇表現も、1. 3 「パンマル」の丁寧度の中で述べたように、話し手は聞き手の年齢の上下関係、親疎関係や社会的地位などに合わせて聞き手に相応しい待遇表現をすべきであるが、日本語の待遇表現を正しく駆使するためにはもう一つ大事な要素がある。「ウチ」と「ソト」の関係である。「ウチ」と「ソト」を決定する基準は、日本人にとってもその認識に個人差があり、非常に難しいという。土居健郎(1971)は、遠慮の有無が日本人が内と外ということばで人間関係の種類を区別する場合の目安となっていると述べている。また、牧野成一(1996)は、「ウチ」の空間で起こることを「甘え」だと指摘し、「ソト」に向けてなかなか本音が言えない日本人の心理から、日本人は「ソト」には「建前」でものを言うと言主張する。

日本語の敬語を聞き手に対する待遇表現のレベルで表すと、油谷幸利(1974)が表現した最敬体(いらっしゃいます)は、尊敬語になり、そして敬体(です・ます)は、丁寧語と言い換えることができる。しかし、常体(だ・である)に関しては、一定した表現法がなく、学者によって普通語、通常語、非です・ます体、もしくは、くだけた言い方という表現が使われている。つまり、この部分の待遇表現レベルは、学者の間でも名称が定まっていなくて、一般人にとってはなおさらのこと、敬語でない言い方を表す待遇表現の通称がないということになる。このような現状から、日本では、約30年前にできた俗語「ため口」がその役割の一部を果たして来たのではないかと推察する。

宇佐美まゆみ(2002)は、「言語形式の丁寧度」という観点からではなく、「言語使用」に焦点を当てたより広い理論である「ポライトネス」に基づいて、敬語を待遇表現とせず、「ポライトネス」と表現している。「ポライトネス」とは、円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動すべてを指していると言う。逆に言えば、相手が不愉快ではない、心地よいと感じる言語行動は、例え「ため口」であっても、ジョークであっても、ポライトであると主張する。このように、敬語体系や待遇表現を論じる中で、「ため口」という単語が取り上げられたということは、「ため口」という表現が以前よりも広く認知され、日本のことば社会に定着しつつあるという証ではないかと思う。

### 2.3 「ため口」の認識度

約30年前から若者を中心に使用されてきた「ため口」は、現代日本語の敬語体系、すなわち待遇表現において「だ・である体」のレベルの一部として扱われているが、その研究はほとんど行なわれていない。「ため」ということばが、賭博用語の「同日(ゾロメ)」に由来し、最初は不良少年という集団によって使われたことばだったという事情がことばのイメージに幾分影響を及ぼしているかも知れない。そこで、実際に「ため口」ということばが日本人にどのくらい認識され、どのように使われているのかを世代別に調べるために、筆者が現在教えている大学生を中心に、その家族や知人を含めた271名にアンケートを行なった(実施期間:2006年7月初め~8月末)。

調査者の年齢構成(18歳から67歳にまたがる)

10代(18歳~19歳): 78名	20代(20歳~29歳): 90名
30代(30歳~39歳): 30名	40代(40歳~49歳): 30名
50代(50歳~59歳): 33名	60代(60歳~67歳): 10名



- (問1) あなたは、「ため口」という単語を聞いたこと、もしくは使ったことがありますか。①使ったことがある。 ②聞いたことはあるが使ったことはない。  
③聞いたこともない

下記の集計表1は、回答①、②、③を世代別に人数で示したものである。

集計表1. 「ため口」の世代別使用度

世代 \ 回答	答え①	答え②	答え③	合計
10代	77名	1名	0名	78名
20代	87名	3名	0名	90名
30代	25名	5名	0名	30名
40代	22名	7名	1名	30名
50代	11名	16名	6名	33名
60代	3名	4名	3名	10名
合計	225名	36名	10名	271名

集計表1から、「ため口」のことを知っている答え①と②の数は、271名の中で261名に達し、全体の約96.3%を占めていることが分かる。つまり、元来一集団のことばだった「ため口」が広く浸透しているのである。しかし、「ため口」を聞いたことのない人は、10代～30代が0名であるが、40代～60代の世代には10名いた。これに答え②の合計36名を加えると、17.0%の人々が「ため口」を使ったことがないことになる。

- (問2) 「ため口」は、どういうことばを意味しますか。(複数でも可)

- ①年下が目上の人に使う失礼なことばのこと
- ②年上が年下に普通に使うことばのこと
- ③仲間同士で使うことばのこと

この設問に対しては、複数回答とし、其々の答えを世代区分なしで集計した。そのため、全体の数は被調査者の数より多くなっている。

集計表2. 「ため口」の使用相手に関する世代別認識度

	答え①	答え②	答え③	合計
10代	10名	50名	78名	138名
20代	14名	53名	86名	153名
30代	7名	10名	28名	45名
40代	6名	10名	24名	40名
50代	7名	9名	20名	36名
60代	3名	1名	4名	8名
合計	47名	133名	240名	420名

集計表2では、60代の答えの数が人数の10名より少ないが、これは問1の設問で「ため口」を聞いたこともない③で答えた3名を10名から引いた7名の答えだからである。答え①、②、③を全体の数420（47 + 133 + 240）に対するパーセントで表すと、①が11.2%、②が31.7%、そして③が57.1%になる。この結果から、「ため口」は、やはり「仲間ことば」として広く認識されていることが分かる。そして答え①を選んだ人を世代別にパーセントで示すと、10代7.2%、20代9.2%、30代15.6%、40代15.0%、50代19.4%、そして60代が37.5%である。年齢層が上がるにつれて「ため口」は目上に対する失礼なことばであるという認識が強くなっている。

(問3) あなたは、「ため口」ということばに対してどういうイメージを持っていますか。

- ①とても良い ②良い ③何とも思わない ④悪い ⑤とても悪い

集計表3. 「ため口」に対する世代別イメージ

	①	②	③	④	⑤	合計
10代	1名	10名	57名	10名	0名	78名
20代	2名	13名	61名	14名	0名	90名
30代	0名	2名	18名	10名	0名	30名
40代	0名	1名	17名	10名	1名	29名
50代	0名	3名	9名	12名	3名	27名
60代	0名	0名	1名	4名	2名	7名
合計	3名	29名	163名	60名	6名	261名

集計表3の合計人数が261名であるのは、問1設問に対して答え③（「ため口を聞いたこともない」）を選んだ10名がいたからである。「ため口」に対する良いイメー

ジの①と②を合計して世代別にパーセントで表すと、10代 14.1%、20代 16.7%、30代 6.7%、40代 3.4%、50代 11.1%、そして60代は0%であり、10代と60代の差は歴然としている。悪いイメージの場合も良いイメージと同様、④と⑤を合計してパーセントで表すと、10代 12.8%、20代 15.6%、30代 33.3%、40代 37.9%、50代 55.6%、そして60代は85.7%になる。このことから、年齢が高くなるにつれて「ため口」のイメージが悪いのがはっきりと見て取れる。

以上、このアンケート全体から分かったことは、「ため口」は、10代～30代の間では、ほとんど当然のように使われているが、40代以上の世代になると、少々個人差はあるものの「ため口」使用頻度は少なくなるのが判明した。そして「ため口」は本来の「仲間ことば」から「年上が年下に普通に使うことば」へと広く認識されるようになってきている。しかし、「ため口」に対するイメージは、年上の世代はもちろん、一部の10代や20代にも悪いイメージを持っていることも明らかになった。

### 3. 韓国語の「パンマル」と日本語の「ため口」の違い

韓国語の中の「パンマル」と日本語の中の「ため口」の相違を〈表3〉でまとめ、その違いを比べてみたいと思う。

〈表3〉「パンマル」と「ため口」の違い

	「パンマル」	「ため口」
名称	待遇体系の名称の一つ	賭博用語のぞろ目に由来した名称
歴史	「ハングル」創製(1443年)以前から使用される	昭和の中期頃から使用される
待遇体系レベル	等称形と下称形を合わせたレベルに位置づけられている	待遇体系のレベルにはない
丁寧度	高くないが、低くもない	低い
認知度	韓国人なら世代に関係なく全ての人が知っている	若者の間ではほぼ定着しているが、40代以上ではまだ十分認知されていない

〈表3〉で示したように、韓国語の「パンマル」は、韓国語の敬語体系、つまり待遇表現の名称の一つであり、丁寧度で示したように、幅広く使われていることばである。つまり、年上であっても親密な間柄には甘えた言い方で使用可能であり、年下(中学生以下)であれば、初対面でも「パンマル」で言うのが普通である。一方、「ため口」は、昭和の中期頃から使われ始めたことばで若い世代にはほぼ定着しているが、中高年

の世代にはことばのイメージも悪く(集計表3)まだ十分認知されていないことばである。

従って、昨今中高年の日本人韓国語学習者が増加していく中で、「パンマル」と「ため口」の共通する一部分だけを強調し、あたかも「パンマル」と「ため口」が同一であるかのように安易に紹介されることは、「パンマル」に対する否定的な見方を醸成し、学習意欲を低下させることにもなりかねない。

#### 4. 韓国語待遇表現の指導方法

外国人に韓国語を教える際、語尾変化が比較的簡単な格式体と、語尾変化が簡単ではないが、日常会話によく使われている非格式体の「パンマル」や「パンマル+ヨ」の表現をどのタイミングで教えるかは、常に教師の悩みの種となっている。김정희(1999)は、韓国に居住している外国人の待遇表現の理解能力を調査し、待遇表現の理解能力の高さは、居住期間の長さではなく、待遇表現を学んだ時期の早さにあると言う。水谷信子(1989)も、日本語教育の開始時期が待遇表現の指導開始時期であると述べている。

一方、山下秀雄(1989)は、丁寧語ではない待遇表現は、仲間以外の人に対して非礼であるので、早い時期に教えるのは問題があると言う。このように、待遇表現の指導時期については、様々な見解があるが、最も重要なことは、学習者の学習目的に沿って指導すべきだということであろう。筆者は、毎学期授業の冒頭で、学生の学習目的を調査しているが、毎回圧倒的多数の学生が、会話能力(Communicative Competence)の習得を第一希望にあげている。つまり、「パンマル」を含めた待遇表現の指導は避けて通ることはできないのである。

日本語の待遇表現より複雑な韓国語の待遇表現を、分かりやすく効果的に教える目的で、筆者(2003)は日本語の待遇表現体系に合わせた韓国語の待遇表現レベルを作成し発表した。本稿では、その時に作成した表を基盤として、本稿の1.2の表2の区分法を取り入れて新たな表を作成することにした。具体的には、先ず、日本語待遇表現の尊敬語(いらっしゃいます)にマッチさせるために、韓国語の主体敬語法で使う尊敬を表す語尾「-시-(si)」を聴者敬語法に取り入れた。主体敬語法というのは、本稿の1の2でも述べたように、話し手や聞き手の話題の主体に対する敬語法である。しかし実際には、聞き手をうやまう際にも用いる。서상균(1996)も主体敬語法で使う尊敬を表す語尾「-시-(si)」を聴者敬語のレベルに導入する必要性を論じている。また実際に韓国でアンケートを実施し、両言語の敬語表現を比較研究した荻野綱雄

(1989) も、聞き手敬語におけるこの尊敬接詞 ‘-시-(si)’ の重要性を指摘している。野元菊雄 (2000) は、日本語の尊敬語は第三者への尊敬を示す時ばかりではなく、聞き手についても使われることばであると説明している。このような概念を丁寧度のレベル分けの名称として取り入れてみた。

(表4) 日本人に分かりやすい韓国語待遇表現レベル

文 体	尊敬体		丁寧体		パンマル体	
	格式	非格式	格式	非格式	格式	非格式
平叙文	-(으)습니다	-(으)세요	-습니다/-습니다	-아요/-어요	-니다/는다	-아/-어
疑問文	-(으)십니까	-(으)세요	-습니까/-습니까	-아요/어요	-니, -지	-아/-어
命令文	-(으)십시오	-(으)세요		-아요/-어요	-아라/어라	-아/-어
勧誘文	-(으)시죠	-(으)세요	-십시오/-읍시다	-아요/-어요	-자	-아/-어

(表4) の丁寧度の名称を日本語に合わせると、パンマル体は常体になり、丁寧体と尊敬体は敬体になるが、敬体には「丁寧語」と「尊敬語」があり、それぞれに丁寧の度とうやまいの度がある (野元菊雄、2000) ということから、うやまいの度も含めたレベル分けとして、上記のような3つの分け方になった。そして、丁寧体の下のレベルは、本稿の2の2で言及したように、日本語の通称が一定してないところから、韓国語の「パンマル」をそのまま取り入れた。教師は、(表4) を教える際、「パンマル」と「ため口」の違いなどを学習者に明確に説明することが求められる。

## 5. おわりに

会話能力を身に付けたいと思う韓国語学習者にとって、会話で広く使われている非格式体の「パンマル」は、非常に重要である。しかし、その「パンマル」のことを一部の著書で「ため口」として扱っているため、「パンマル」が正しく理解されていない。韓国出身である筆者は、「ため口」に関する知識に乏しく、その実態を把握するために「ため口」に関する日本人の認識度のアンケート調査を行なった。この調査結果を基に「ため口」と「パンマル」の比較が可能となり、更に、「パンマル」を取り入れた日本人学習者のための待遇表現レベルを提示できたことは幸いであった。

## 参考文献

- 고광모 (2001) 「반말체의 등급과 반말체어미의 발달에 대하여 (판말체체의 레벨  
분けと판말체체語尾の發達について)」『언어학 (言語学)30』、언어학회 (言語  
学会)
- 김정희 (1999) 「외국인을 대상으로한 한국어 대우법 이해능력 조사연구  
(外国人を対象に調査した韓国語待遇表現理解能力研究)」梨花女子大学大学院
- 김혜숙 (1987) 「대우법의 현용 - 설문조사 분석을 중심으로 (待遇表現의 現況 - 아  
ンケート分析を中心に)」『목덕어문 (モンミョク語文) 2』、東国大学
- 서상규 (1996) 「일본어의 높임법과 한국어교육 (日本語の敬語法と韓国語教育)」  
『말 (ことば)21』、延世大学韓国語語学堂
- 서정수 (1989) 『존대법의 연구 (敬語法の研究)』、한신문화사
- 성기철 (1996) 「현대한국어 대우법의 특성 (現代韓国語의 待遇表現의 特徵)」  
『말 (ことば) 21』、延世大学韓国語語学堂
- 차현실 (1990) 「반말체의 구성과 반말체어미의 문법적 기능에 대하여 (판말체체  
의 構成と판말체체語尾의 文法機能について)」『梨花語文論 11』、梨花女子大学梨  
花語文学会
- 한길 (1986) 「현대국어 반말에 관한 연구 (現代韓国語의 판말에 關する 研究)」、  
延世大学大学院
- 宇佐美まゆみ (2002) 「ポライトネスという概念」『言語 1~3』、大修館書店
- 荻野綱雄他 (1989) 「対照社会言語学と日本語教育」『日本語教育 69』
- 荻野綱雄 (1990) 「日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照」  
『朝鮮學報 136』
- 辻村敏樹 (1989) 「待遇表現 (特に敬語) と日本語教育」『日本語教育 69』
- 土居健朗 (1971) 『「甘え」の構造』、弘文堂
- 長嶺聖子 (2003) 「韓国語における母音調和の概念に基づく用言語尾變化に関する一  
考察」『Southern Review No. 18』
- 野間秀樹 (1996) 「현대한국어의 대우법체계 (現代国語의 待遇表現体系)」  
『말 (ことば)21』、延世大学韓国語語学堂
- 野元菊雄 (2000) 『敬語を使いこなす』、講談社現代新書
- 牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学』、(株)アルク
- 水谷信子 (1989) 「待遇表現指導の方法」『日本語教育 69』

森岡清美他 (1996) 『新社会学辞典』、有斐閣

山下秀雄 (1989) 「日本語教育における初級と待遇表現」『日本語教育 69』

油谷幸利 (1974) 「現代朝鮮語の敬語に関する一考察」『朝鮮学報 73』

油谷幸利 (1997) 『ハングルの基礎』、大修館書店

(琉球大学法文学部 非常勤講師)

**A Study on Differences between Korean Ban-mal and Japanese Tame-guchi  
—Related to Teaching of Attitudinal Expressions—**

NAGAMINE, Seiko

**Keywords** : formal expressions, informal expressions  
ban-mal, tame-guchi, attitudinal expressions

**Abstract**

The similarity between Korean and Japanese languages as seen in word order and grammar seems to prompt many Japanese persons of middle and advanced age to try to have quick access to Korean in a hope to appreciate their favorite Korean movies or T.V. programs. Also, almost all of my students in my college classes express their wish to study daily or conversational Korean language for the similar purposes. In fact, there are two types of expressions in Korean, formal and informal or conversational Korean. The latter is called the ban-mal style and it is the expression which is widely used in the movies or T.V. program. In Japan, however, some language books on Korean equate ban-mal to Japanese tame-guchi, or gangsters' jargons adopted by youngsters of certain groups in the 1970's. This paper aims at pointing out basic differences between ban-mal and tame-guchi in order to minimize confusions or misunderstandings caused by this unjustifiable identification. The writer conducted a questionnaire research to find out how widely tame-guchi is used or recognized in Japan. She then formulates a table of speech levels of Korean attitudinal expressions as an effective teaching aid for Japanese students.

(University of the Ryukyus)